

秋水
泡語

卷
の
六

二
〇
〇
二
年

哲学者が言う。「生は詩の出発点であり、人間、事物並びに自然に対する生関係が詩の核心となるのである。」

「詩は、…諸々の生関係の内に存する出来事や人間や事物の意義を明らかにしようとする」

「生に内在するといふことは、生に対して諸々の態度をとることによって、即ち諸々の生関係によつて実現される。これが「詩人は真の人間である」といふ大胆な言葉の深い意味でもある。故にかかる夫々の態度に対しては、世界はまた夫々の相を開示する」と(デイルタイ)。

別の人は言う。「いいえないもの、語りえないものを言葉として純粋な結晶として抽出すること」と(ベンヤミン)。

「しかし和歌と歌論の枠組のなかで、その「哲学」をある程度以上に深め、広げることとは、おそらく誰にもできない相談」(加藤周二)でもある。

それでも、わたしの愚痴でもあるつぶやきは、なんとか口をついて出て、人間の条件をかいま見せる。その数片が言葉の美しい結晶とまでなっていれば望外の幸せである。

一月一日

年頭に『莊子』を読んで無為学ぶ
知無く無力の者が無為をまねるのも無謀である。進退窮まる。

一月二日

初雪を残す灯籠咳一つ

一月十二日

いぶかしい人と連れ立つ寒の道

一月十四日

人形の頭かしら七十雪の里

雪しんしんやがて人形目を開く

一月十七日

いくつもの苦樂をなめて人はみなその運命を知って受け取る

一月二十日

大寒の朝日に樹々と並び立つ

音も無く遠く自動車行き交ってかしこの人と縁無きにしも

一月二十二日

ヒトニハコトバガムナシイコトガアル

一月二十三日

作り為すこれらの回路いつかまた思いめぐらす日々を求めて

一つずつ回路は絶たれ人を成すその物語消え果てる時

「百八十メートル掛け二百五十メートル四方の世間で見るときほどのことは見たと君は言っているのかい？」

「ええ、もつと美しいものや雄大なものを見たいと……」

「昔わたしが言ったことだが、この世界は経験し尽くすことができないほどとほうもないものだよ。もつと広い世界に出て行くことを考えたまえ」

「しかし、世界に出て行くことはむづかしいことです。どういう工夫があるでしょう？」

「そう、たしかに。それを会得した人は少ないね。遠く退いて成功した人もいる。たいてい討って出て敗退するんだが。……うーん、その道を探すのが人生だよ」

「先生、それでは助言になりません」

「わたしも他の人間の工夫までは分からんということだ」

「……」

「とにかく、心樂しむことに会おうまで、見つめ尽くしなさい」

一月二十五日

凍えてもささやかな美のかたわらに

二月一日

日はめぐる残り月にも霜降りて

二月三日

豆腐売る笛の音のする節分会

千回のため息をつき鬼が住む

二月四日

龍のひげ豆二つ置き春立つ日

二月八日

梅咲けば係ぐべからず猫と人

尋ね行く無可有の里土が降る

二月十一日

しろうおが海にとどまる名残り雪

二月十七日

ガンジスのほとりに骸焼く煙

幾千年人焼く火種燃え尽きず

臨終を生きるベナレス人という奇怪な者をあらわに見せる

人が生きるということを

賦に表わせば

.....ここに尽くせぬ言葉あるべく.....

死ぬということのほか

繰り出す言葉を終わらせるものはない

二月十八日

菜の花を胃の腑に入れて花となる

二月十九日

ただ春に会うために来た徒手の蝶

二月二十一日

「末法窟出土世間如此経断簡」海蝶居士訳出

国会であのような論議がなされた

彼女は聞いたと言ひ、彼は言わなかったと言ふ

全体これは危機にある国の重要な事だったのか

その日、わたしは金策に疲れていた

アーナンダよ、かくのごときものを政というのだ

どこかでオリンピックが開催された

彼は突いたとされ、彼女は手心は加えなかったと言ふ

全体そんな競技を明朗な精神で競えるのか

その日、わたしは職探しに疲れていた

アーナンダよ、かくのごときものを祭というのだ

地球で帝国が生み出された

彼が悪とは何かと言い、正義はこうだと言う

全体正邪を自分で判断しなくてよくなったのか

その日、わたしは胸を銃弾で撃たれた

アーナンダよ、かくのごときものを法というのだ

学校で教育にゆとりが作り出された

彼らは考える力と言い、ある者はその力が失われたと言う

全体人が人となる過程をいじくりまわしてよかったのか

その日、わたしは夜遅く塾から帰っていた

アーナンダよ、かくのごときものを知というのだ

テレビで曲士達のサロンが開催された

彼女はよしと言い、彼は違うと言う

全体これは仏国のサロンほどのものだったのか

その日、わたしは畑へ水を運んでいた

アーナンダよ、かくのごときものを和というのだ

.....
.....
その日、わたしは西藏の高地を五体投地で歩んでいた
アーナンダよ、かくのごときものを.....

.....
.....
.....

アーナンダよ、
このように、わたしは百の人生を遍歴した
そして、百の教えに出会ったのだ

アーナンダよ、
あなたは今、無量光の中にいる
あなたのすべてを見透かされている
さあ答えてみなさい

アーナンダよ、

あなたは、真実の世界を見ようとしているか

あなたは、あなたの真実の姿を見ようとしているか

あなたは、あなたの人生で為すべきことを為そうとしているか

二月二十二日

草原の奔馬砂塵にかげろう日

二月二十三日

山門の仏足冷える浅き春

(母の父の法事)

二月二十六日

行く時を凍らせる美に人は酔う

三月一日

春雨にけむる野を行く老いた仕手

腰少し引きおもむろに花の下

三月二日

「なぜわれわれは文法上のしやれを深遠と感ずるのか、とみずからに問え。
(しかも、これこそ哲学的な深遠さなのである)」……ウイトゲンシュタイン
赤子泣く声や小雛を置く床屋

円形の白髪慰撫する春の風

「自己は主として頭の中にあり、頭と喉の間にある特異な運動から成っている」

……W・ジェイムズ

三月六日

木の芽時大きな息をする大地

三月八日

春の夜の夢に見知らぬ橋渡る

目覚めればこの者として春の朝 (また立ち向かう状況の中)

三月十日

春陽射しまぶたを超えて血に溶ける

百三の老人笑う「新聞で見始めるのは悔やみの欄」と

三月十三日

曲がり角木蓮に会い身を正す

三月十四日

バス旅行、同行二人。

山道をつばめが春と来る馬籠

坂登る木曾路は今が梅の頃

木曾五木切った大鋸展示品

藤村の端正な文字草芽吹く

三月十五日

雪囲い取る日も近く霧の雨

朴葉みそ味わう萱を落ちる水

合掌の村の椿はまだ蕾

三月十六日

ゴンドラの眼下弧を画き滑る人

白山は浮世を離れ彼岸前

天翔ける鳥船志賀の春の空

三月二十一日

植木買ひ桜咲く道選び行く

砂降って命数思ふ彼岸の日

三月二十二日

分ち得よ受記をことほぐ明るさを

桃源の道を教える春の雨

きりのぼるさとのいとなみしんのひと

三月二十四日

「春の近江路に駄句を連ねる――安土」

麦畑に野を焼く煙近江の湖

花つぼみ安土の山に昼の月

うぐいすや伝何某の屋敷跡

（伝羽柴秀吉屋敷跡等）

石仏と堇をよける大手道

花冷えや信長公しんちやうの石の廟

天主無く湖西の山に残る雪

全山を今は一寺の総べる春

（総見寺）

木々芽吹く廃寺の塔は無声なり

まぶしげな仁王のまなこ春陽射し

菜の花や城址に犬がいばりする

万乗の主失い平安に今は樂土も檜の林

考古博物館、城郭資料館、

近江路に異国の館織田の裔

春耕の土ぼこり吹く湖の風

観音寺姿は見えず上げ雲雀

百代の過客を見つめ春入日

三月二十五日

「春の近江路に駄句を連ねる――寺社」

鴨見つつ稚鮎釣る人瀬田の川

唐橋に芽吹く柳を渡す風

石山寺

藤村の春の旅寝の茶丈とや

岩座に梅を咲かせる多宝塔

開花待つ天狗の建てた月見亭

一服で春を喫する芭蕉庵

石山の春や式部の般若経

春探す式部の部屋の暗がりの想念の中夢の浮橋

日吉神社

比叡から椿を流す神は時

日吉の杜春に誘われ猿と我

(サルに会う)

宮守は老いた仕事師春支度

高きより桜しだれる樹下の宮

春寒を侘びて神輿は歳を古る

三井寺

三井寺で白帆また見る春の湖

観月の舞台の上の花・比叡

戸を閉める止観道場ぼけが咲く

夕陽さす三井の鐘楼春の月

鐘鳴って止観の時や春の暮れ

春宵を惜しみ見上げる淡き月

山に入る疎水は御井の寺の下桜待ちかね尋ね行く人

弘文の霊を鎮める園城寺閑伽井屋の水音絶えず湧く

ほおえみを円空仏に誘われて同化するまで金堂巡る

八面に一切経を蔵す堂如意法輪は我が春の夢

三月二十六日

「春の近江路に駄句を連ねる――栗津、湖」

旅衣スプリングコート着て芭蕉塚

木曾殿をとむらう人の終の宿

想念は枯れ野を守る地藏尊

義仲寺を墓地に選んだ意思偲ぶ

巡る春芭蕉と愛でる膳所の朝

浜大津から湖に浮かぶ。

法螺鳴らし比良八講の春迎え

春画す天台座主の浜祈禱

比良越える風やわらかく八講が琵琶湖を巡り平安願う

船は名をみしがんと申す大船にて、一葉を浮かべるといふ趣から離れ
大きな音をたてつつ湖上を進めり。半ば夢中に時空をへめぐる、

ずんずんずん、車輪を回し船が行く

近江八景変わり果て

いにしへの志賀の都に・・・

コンクリートの建物と、鉄道さらに高架道、

それでも琵琶湖は大きくて

なんとか人を生かしている

わたしもなんとか春を娛しみ

ぼんやりかすみを見つめている

水をかく音、ずんずんずん

反歌

鷗鳥影と連れ立ちまっすぐに湖面を滑りかすむ彼方へ

三月二十八日

赤福にめでたさ貰う伊勢の春

西行の桜と月を詠む歌は生死の覚悟美しく問う

言明することは覚悟を強いものにする。

三月三十日

木を植えて花海棠と昼の夢

白江の月に海棠眠り得ず

三月三十一日

蝶が来て利休梅散る一二片

四月二日

藤の花世に生まれ出て空染まる

四月三日

春にして亡者の城を脱し得ず

蝶となれかの漆園の小吏とも

四月五日

英国『エコノミスト』誌が、「日本の悲しみ」という表題で「長く
ゆっくりとした衰退」を取り上げているそうだ。その社会の中にいて
実感する。

春愁に「日本の悲しみ」身に沁みる

四月七日

蝶の子を殺す薬を撒く日和

薄茶飲む莊子のことば腑に落ちず

四月八日

春がすみまた桃源に近く在り

花祭り蓮華畑をとぶ少女

同室で書を読む蜘蛛が袖よぎるわが頼るべき糸を紡がず

四月十日

土降って有象無象を埋め尽くしただ一人でも立つ者よ立て

四月十七日

難題に痛む胃で食う新わかめ

四月十八日

皆花が咲き急ぐ世に咲かず在る

四月十九日

耳澄ます森で緑が湧く音に

樹々照らす光が緑の粒となる時の刻みを見つめる正午

四月二十日

酒後の夢醒めれば春の深い闇

四月二十六日

春の空銀の波間を金色の光輪放ち月進み行く

小事成り山吹が散る胃の痛み

四月二十九日

「安息日」

一服飲んで

正しい姿勢で

頭を北に

右腹を下に

赤い毛氈の上に

横になつて、

山の庵で

春の海と

名づけられた

つつじを眺めていると

風に運ばれ

小賀玉の

かすかな香り、

このまま涅槃に

入ろうか

鍵盤の玉ぎよくの鳴る音風踊る

楽聖の曲に安息四月尽

五月一日

深々と水を湛えた心海は波に揺るがず思惟を育む

五月三日

大海に蛙鳴く闇森の道

五月九日

莊周も天地の槲に蛹の身

五月十二日

目を細め光る風見る画家として

五月十三日

ゆとりの無い視野狭窄を射抜かれる落日の後輝く者に

五月十七日

「こんばんは」機嫌よい児の挨拶に一呼吸おく行く川の音

五月十九日

小庭のほたるぶくろは背伸びする

木の影が障子に揺れる夏点前

五月二十一日

新調の日傘を回す老婦人

じやがいもの畝で雀が花仰ぐ

五月二十五日

あじさいと海と月見る月見台

五月三十一日

樹々育つ倦怠の時五月尽

明滅する定め螢の息する間

六月三日

地の底を這う者として霧の中

六月八日

日よけ帽かぶり竪穴住居掘る

幾千の初夏の日差しを埋めた場所

六月九日

海のかた今という時示す塔

六月二十日

梅雨曇り坐忘に未だほぞを噛む

百日紅未開の時に彫琢す

六月二十一日

わたくしは右往左往し夏至いたる

渴く樹々天啓もなく皐月晴れ

池埋める人に空梅雨黙示する

六月二十二日

梅雨寒や犬が静思し低く鳴く

六月二十六日

水の田を緑に変える陽の力この身を染めて変成させよ

行く時とともにくずれる色身を解き放つ法陽に見つめつつ

七月二日

梅雨晴れ間海馬瀕死の黒き洞

七月五日

説き来たりまだ残る道めまいする

七月十三日

初蟬が自転車を抜き路地に行く

七月十八日

早足で行けば木々から夏の声

事成らず苛立つ腹に一輪の月下美人の香りを入れる

実に小さなことが日々の大きな関心事となる。

七月十九日

あでやかな花も一夜でしおれ果ていのちを巡る葬送の雨

梅雨行くか妻の寢息のおだやかさ

願いあり麦茶が腹にしみる朝

八月一日

遠い花火を電気を消した書斎の窓越しに見る。

遠花火遅れて届く音響が闇に光をまた解き放つ

八月八日

光彩をとどめる瞳闇に在り我と世界の始原の場所に
朝の陽に蟬のいばりと淡き虹

盆

暮れる海無窮花が落ちる須臾の時

虫の音に気づく遠くで盆踊り

君が代を歌い不戦を誓う日に猫背の人が式辞を述べる

この秋に有事法案再度出す首相は不戦はぎれよく言う

これがまあわたしの国かぞろぞろとこっかいぎいん靖国参り

映像がこれらすべてを映し出す感受する人無いかのように

この国は普遍の価値を貶めてその精神を明日に開かず

八月二十五日 「建仁寺展」。

風神と雷神と我三角の頂点に立ち面相比べ

友松の画く芍薬も松の友

画中の人背を斜めにし美の化身

八月二十八日

イランの映画監督・作家のモフセン・マフマルバという人の言葉、「(バーミアンの)仏像は、恥辱のために崩れ落ちたのだ。アフガニスタンの虐げられた人びとに
対し世界がここまで無関心であることを恥じ、自らの偉大さなど何の足しにもならないと知って砕けたのだ」

人絶えて誓願空し石仏は菩薩たりえぬその身を砕く

八月三十日

早起きの蛙と目覚め井の底で降る露を飲み天地を思う

八月三十一日

青稲田分けて野分が海を行く

九月九日

にんげんのみにくさをみるとんぼの眼

きりぎりす樂を奏でる徳ある士

九月十一日

願いつつ窓を開ければ白い萩

九月十二日

知恵足らぬアダム糊口に梨を食う

九月十四日

海を見に行く。

蝶となり白帆広げよ青北風に

玄海は本日青し秋にして

果てしない青や無窮花を散らす秋

鶏頭が海風に立つ秋旱

散文で詠え白秋乾く海

宵闇に二見が浦は銀鼠

星宿も自然の法に流転する人は此岸で寄す波を見る

九月十八日

草刈つてたばこ吸う人稲実る

草刈った畦に水引き曼珠沙華

九月十九日

秋陽射し白壁の家野に据える

九月二十一日

幾人が守札の門を通り得る塞ぐ戸無くてなお狭き門

時統べる王は滅んで漏刻の門に日影の短い秋よ

千秋の美醜見て立つ首里の城

島の秋御嶽石門閉じて在り

龍潭で名月を食む錦鯉

九月二十二日

四千の自決の壕や野分あと

「過去帳って何？」と若者ひめゆり資料館

惨い死の遺影の並ぶこの部屋を「彼等」の執務する部屋とせよ

少年は摩文仁の丘の木の下にかえり見て立つ死を迎えた日

ただ詠じるだけで、この人間の状況を変えることはできないのか。

幾条もの光となって彼岸の陽慶良間の島へ入る時の中

九月二十六日

方丈に花野を生けて世界観る

螭螂を踏んで巡検する亡者

(巨漢の亡者を見かけた)

添水にて亡者退け茶を喫す

彼岸過ぎ生者は花野遠く見る

螭螂は世界を変える斧持たずただ見極める人と亡者を

九月二十八日

霧のぼる南山を出る無碍の風

河原に並べた燈籠を見に行く。

燈籠を河原に五千虫騒ぐ

燈籠に蓼の絵かいた子供の名

映る灯を水面に止め川の秋

宙に浮く文鎮幻視九月尽

九月二十九日

目の前をするする蜘蛛が降りて行く地上を探る測鉛として

食われずにしつかりと立つ秋なすび

十月十二日

音楽で三十年をふり返り見出す我はこの者として

あれこれのものも半ばに時過ぎて我が変容をなお願いつつ

うわ言に「父は兵庫の……」と言う母と並んで座り更ける秋の夜

十月十六日

天高く仰いで今日も地を歩む

十月十七日

自転車で秋海棠が野道行く

汗かいて振り出しにいる秋の暮れ

秋雨や香煙ゆるく古き堂

十月二十一日

減反の荒れ田ぼうぼう暑い秋

読「素月を信ずる心」、於露台仰觀十月満月
夜寒の月を仰いで首をかしげたら星が飛ぶのが見えた

十月二十五日

秋晴れに月幻視して吐すえる

火の山の便りに今は初氷

十月二十八日

末の世に無窮花を散らす初時雨

一株のコスモス万象そこにあり

十月二十九日

「世界という広大な言語の統辞法」つたなく一つの語を探す我

十月三十一日

老いる秋が天の雲地の煙となった朝、
ガリレイ温度計の緑の玉が静かに浮かんた、
その無言の深い緑が言い尽くせぬように語る。

十一月一日

時雨降る道はるかなり蚯蚓行く

十一月二日

かみなりが時雨を走る息長く

十一月六日

山腹の鳥居に向かう秋の蜂

願かけて翅あたためる秋の蜂

ともかくも堡塁探す秋の蜂

十一月七日

椎茸をかみなりが出す冬立つ日

十一月十二日
春の使者黄砂紅葉の上に降る

十一月十三日
金色の柩車小春につとめあり

黄金の輦で小春の日の下を行く者として深く息吸う

十一月十五日
砂浜に延々TV顯示するいま人の世がここに漂着

徒手にして桜紅葉の下を行く憂い顔した騎士の姿勢で

生と死の境を生きる人間のつむぐ言葉は行為をめざす

十一月二十四日
崩壊を見る眼を閉じて日向ぼこ

この我も崩壊の中枯れ木立つ

光明がことばの配置変えるまで気の遠くなる時間に耐えて

十一月二十九日 音消えた冬田の闇を行く鹿の子

十二月三日

狂歌「冬の嵐の夜」

ぼんぼんの党首大見得切りそこね冬の嵐に立ちすくむ国
立ち往生「骨太改革」委員会瀕死の国を見棄てたままに

十二月七日

冬暖かはぐれ鳥の道遠し

散りぎわの黄葉内から火照る色

実存を生かす力を今の世に見出すべを探ね行く者

十二月八日

老人短期滞在所の白板に「今日は戦争の始まった日」と書いてあった。

戦争の記憶置き去り老いの冬

人間の条件見つめ軒の柿

十二月十三日

冬風は歴史の波の目撃者

詩句二三うそぶく者も冬の中

十二月十四日

霜おりた野も幻郷に人誘う

十二月十五日

山居図を無限に遠く年の暮れ

NHK日曜美術館で富岡鉄斎をやっていた。

十二月十六日

変え得ない場につれ戻す酒後の柿

十二月十七日

症状を断層写真が証しする意味をむすばぬ領野黒々

十二月十八日

目覚ましを小わきに冬の夜の夜道

明日覚醒しあること願う

十二月二十一日

風向計滅びを指して年の暮れ

夏柑に十日を残す暮れの雨

し残してキャベツ畑へ向かう人

十二月二十二日
短か世やいよ年の瀬うたた寝す

十二月二十四日
人皆が浮き足立って暮れる年午睡から覚め目をしばたかす

十二月二十六日
杉林伐られ野際は寒寒と

自然は人事に無関心、マスコミという人の機関も同然だ、
お金に窮した絶望者が多くいて、中には乱暴に銀行を訪れ
る者もいる云々、さて、天は、暮れの一日明るく照って、
屋根を光らせる、富んだ家も貧しい家も、昔から言うその
時山は眠っているのだと、行き交う車は人事を乗せている
のだけれど、人も手足を伸ばして眠れるならば、世の中明
るくなるだろうに、できない相談だけれども、わたしを通

り過ぎる時を達観したいもの、禪者のように。

十二月二十九日 冬の庭に対す一輪利休梅

十二月三十一日 行く年をアランの詩論読んで遣る

内海をさざ波と行く除夜の鐘

二〇〇三年 正月
徐山亭 謹製



ウイトゲンシュタイン

ものの名を問うことができるためには、ひとはすでに何かを知っている(あるいは、することができ)のなくてはならない。

哲学とは、われわれの言語という手段を介して、われわれの悟性をまどわしているものに挑む戦いである。

哲学は、最終的には、言語の慣用を記述できるだけである。

哲学はまさにあらゆることを立言するだけであって、何事も説明せず何事も推論しない。

ひとは哲学する際、ついにはいまだ不分明な音声だけを発したくなるような段階へと到達する。しかし、そのような発声は、一定の言語ゲームの中にあつてのみ、一つの表現になっているのである。

言語そのものが思考の乗り物なのである。

夫れ大塊我を載せるに形を以ってし、
我を勞するに生を以ってし、
我を佚にするに老を以ってし、
我を息わしむるに死を以ってす。